

## 確かな読みができる子どもを育てる国語科学習指導 ～「読みの視点」を生かした表現活動を通して～

### 要約

平成29年7月に告示された新学習指導要領や全国学力・学習状況調査等の結果から、読解力に関して改善すべき課題や、目的に応じて文章を要約したり、複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることが課題となっていることが明らかになった。しかし、本学級の子どもたちは、説明的文章を読む際に、筆者の論の進め方や工夫について気付いていることが少なく、筆者の主張に対して自分の考えをもち、表現するところまで十分に至っていない。

そこで、国語科の説明的文章を読む学習において、「読みの視点」を示し、「めあてに対する自分の考え」と「書き手に対する自分の考え」を書く表現活動を位置付けた。そうすることで、叙述や文章に着目し、筆者の主張や論の進め方に対して自分の考えを書く子どもを育てたいと考え、「確かな読みができる子どもを育てる国語科学習指導」をテーマとして設定した。具体的には、説明的文章において、以下の4点から具体的な支援を行い、研究を進めた。

- ① めあてを工夫する  
課題意識をもつために、「なぜ、～」「どうして、～」というめあてをつくる。
- ② 視点の提示  
教材文に応じて、文章構成、筆者の考え、論の述べ方、事実と意見の中で適切な読みの視点を「つくる段階」で提示する。
- ③ 焦点化する「問い」の設定  
子どもたちのつくった考えをさらに深めるために、新たな読みの視点を提示したり、新たな情報を提示したりする。
- ④ 批評文を書く活動の設定  
単元の終末の段階で、筆者の主張や論の進め方に対して、批評文を書く時間を設定する。

実践の結果、以下のような成果（○）と課題（●）を得た。

- 「なぜ、～」「どうして、～」という課題意識をもたせるためのめあてを工夫したことは、子どもたちが課題を焦点化して読み進めるのに有効であった。
- 教材文に応じて「読みの視点」を提示したことは、子どもたちがめあてに対する自分の考えをつくるようにする上で有効であった。
- 伝え合う活動を活性化させるために、焦点化する「問い」を設定したことは、叙述に立ち返り、筆者の主張や論の進め方に対して自分の考えを再構築することができるようにする上で有効であった。
- 単元の終末の段階で、筆者の主張や論の進め方に対して、批評文を書く活動を位置付けたことは、これまで学んだ知識、経験として再構築したことを、自分の言葉で表現することができるようにする上で有効であった。
- 子どもの知識や経験とのつながりを深める支援の工夫
- 低学年、中学年、高学年における「読みの視点」の系統

**キーワード** 読みの視点 問い 批評文

## 1 主題設定の理由

### (1) 社会の要請から

平成29年7月に新学習指導要領が告示された。今回の改訂は、平成28年12月の中央教育審議会答申に示された成果と課題を踏まえて行われた。PISA2015（平成27年実施）においては、読解力について、PISA2012（平成24年実施）と比較して平均得点が有意に低下していると分析がなされている。これは、情報化の進展に伴い、特に子どもにとって言葉を取り巻く環境が変化する中で、読解力に関して改善すべき課題が明らかになったものと考えられる。また、全国学力・学習状況調査等の結果によると、小学校では、目的に応じて文章を要約したり、複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題があることが明らかになっている。これらの課題から、目的をもって文章を読み、書かれていることに関してこれまでの知識や経験をつながけながら自分の考えを表現する子どもを育てる本研究は意義深い。

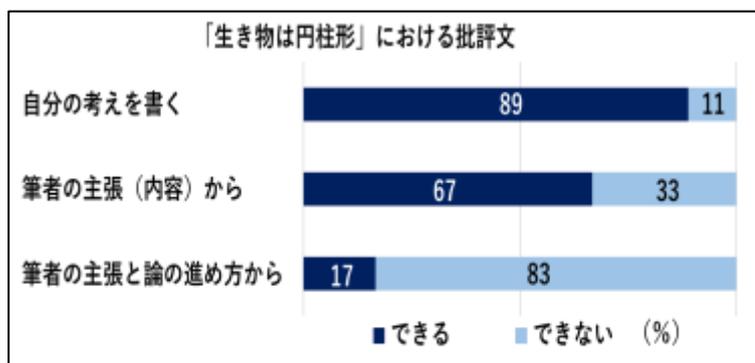
### (2) 高学年国語科学習のねらいから

小学校学習指導要領国語編では、第5学年および第6学年の「C 読むこと」の目標として、「事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。」（構造と内容の把握）、「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。」（精査・解釈）、「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。」（考えの形成）、「文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。」（共有）と書かれている。つまり、ねらいに応じて適切な叙述を選択し、文章構成や筆者の論の進め方について着目しながら読み、自分の考えを表現することが大切である。以上のことから、筆者の主張を捉え、自分の考えをもちながら読み、自分の考えを表現していく本研究主題を設定した。

### (3) 児童の実態・指導上の課題から

第5学年である本学級の子どもたちは、説明的文章において、文章の構成を確かめたり、筆者の主張がどこに書かれているかに気付いたりすることができている。しかし、書かれていることに対して自分の考えを表現する際に、これまで読み取ってきた筆者の主張、論の進め方に対して、自分の考えを表現することに課題があることがわかる。

（資料1）そこで、国語科の説明的文章において、文章のどこに着目して読めばよいのか、着目する叙述や文章（段落）を示しながら、筆者の主張や論の進め方に対して自分の考えを書く表現活動の在り方を明確にする必要があると考える。



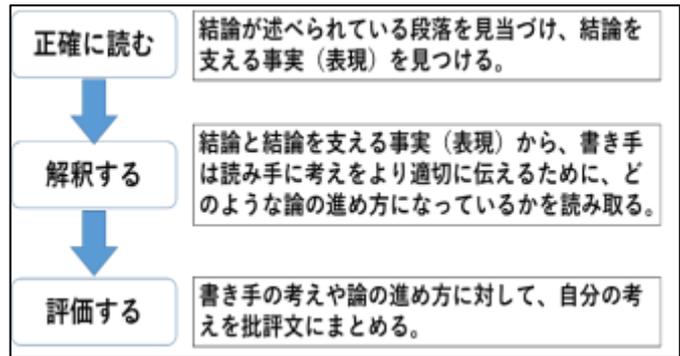
【資料1 児童の実態】

## 2 研究主題の意味

### (1) 主題の意味

#### ① 「確かな読み」とは

これまで自分がもっている知識、経験とつなげながら、書き手の考えや論の進め方に対して、自分の言葉で表現することである。具体的には「正確に読む」「解釈する」「評価する」という一連の学習行為を「確かに読む」と考える。(資料2)



【資料2 確かな読み】

#### ② 「確かな読みができる」とは

読みの目的を自覚しながら、目的達成のために必要な既習の言葉の知識や技能を駆使して、書き手の考えや論の進め方に対する自分の考えを吟味し、吟味したことを言葉で表現することである。

#### 確かな読みができる子どもの姿

- 書き手が何をどのように伝えようとしているのか、書き手の考えや論の進め方に着目しながら、課題意識をもって読み進める子ども
- 着目する言葉を確認し、叙述を根拠に自分の考えをつくることができる子ども
- 論の進め方や表現の工夫に着目し、要旨を捉えることができる子ども
- 要旨や論の進め方に対して、既存の知識や理解した内容と結び付けて、自分の考えをまとめることができる子ども

### (2) 「読みの視点」を生かした表現活動を通して

#### ① 「読みの視点」とは

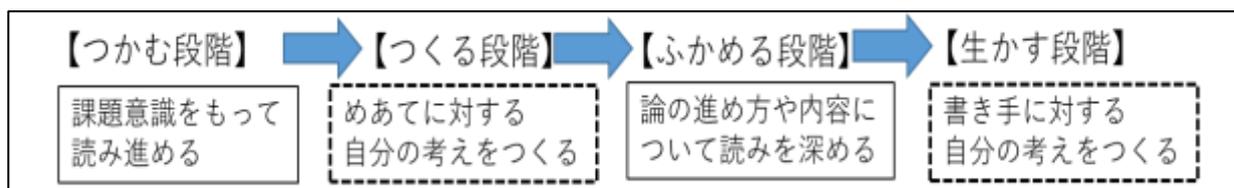
子どもが、自分の考えをつくる際に、着目する叙述や文章(段落)である。

確かな読みができるためには、文章のどこに着目して読めばよいのか、着目する叙述や文章(段落)を示していく。「読みの視点」は、これまで学習してきた説明的文章の言語表現のよさから示される。具体的には、高学年において次のような読みの視点が考えられる。

	読みの視点	具体的な内容
高 学 年	文章構成	・ 話題提示—事例—考え—結論の関係
	筆者の考え	・ 結論と結び付ける、要旨
	論の述べ方	・ 引き付ける表現、比喩表現、文末表現
	事実と意見	・ 筆者の考えを強調する効果、読み手の立場から

② 「表現活動」とは

「めあてに対する自分の考え」と「書き手に対する自分の考え」を書く活動である。



【資料3 表現活動の位置付け】

1 単位時間の中に「めあてに対する自分の考えを書く」表現活動と、「書き手に対する自分の考えを書く」表現活動を位置付ける。

③ 「読みの視点」を生かした表現活動とは

自分の考えをつくる際、「読みの視点」を「つくる段階」で提示し、「生かす段階」で確認をすることである。1 単位時間において、「読みの視点」を貫きながら自分の考えをつくったり、書き手の考えや論の進め方に対して評価したりすることである。

### 3 研究の目標

国語科の説明的文章を読む学習において、確かな読みができる子どもを育成するために、読みの視点を生かした表現活動の在り方を究明する。

### 4 研究の仮説

国語科学習指導における書き手の考えや論の進め方に着目しながら読む学習において、問題解決的なめあての工夫を行い、読みの視点をもとに読むことによって、読みの目的を自覚しながら、必要な既習の言葉の知識や技能を駆使して、自分の考えを吟味し、吟味したことを自分の言葉で表現することができるであろう。

### 5 研究の概要

(1) 検証の対象

小郡市立御原小学校 第5学年1組 (男子11名、女子9名、計20名)

(2) 検証の内容と方法

めざす子どもを育成するために、以下のことに重点をおいて取り組む。

① めあてを工夫する

課題を焦点化するために、つかむ段階で「問い」をもたせる発問を行い、前時とのズレからめあてをつくる。また、「なぜ、～」「どうして、～」という、課題意識をもつことができるめあてをつくる。「問い」は、「言葉に対する問い」「文章の内容に対する問い」「文章の構造に対する問い」が考えられる。

② 視点を提示する

高学年における「読みの視点」を、教材文に応じて提示していく。めあてを確認後、めあてに対する自分の考えをつくることができるように、どの言葉に着目し、どのような方法で考えをつくったらよいか、文章構成、筆者の考え、論の述べ方、事実と意見の中で適切な読みの視点を「つくる段階」で提示する。

### ③ 焦点化する「問い」の設定

焦点化する「問い」は、「ふかめる段階」で行う。子どもたちのつくった考えをさらに深めるために、読みの視点や新たな情報を提示したりすることで、叙述に立ち返り、書き手の考えや論の進め方に対して自分の考えを再構築することができる。

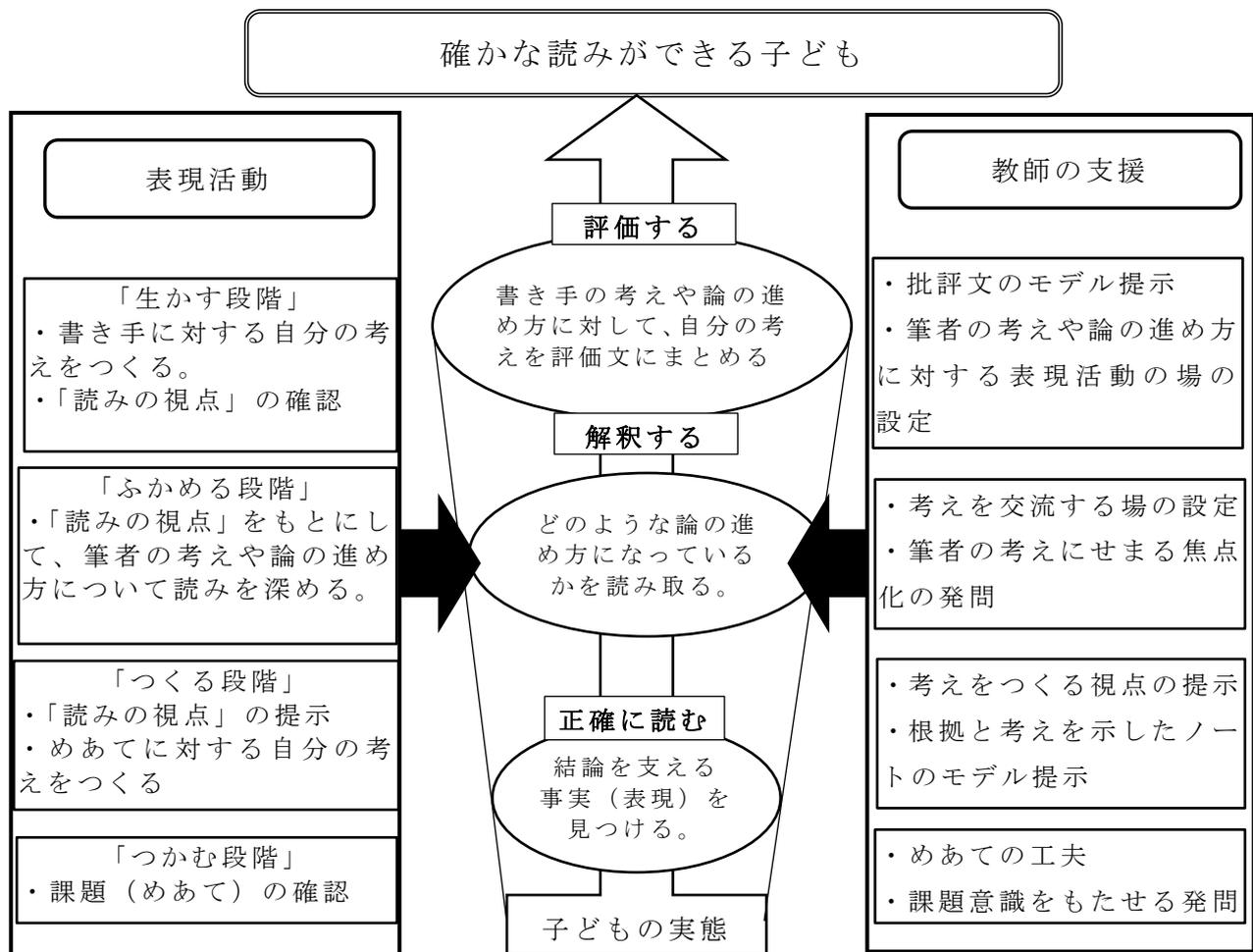
### ④ 批評文を書く活動の設定

単元の終末の段階で、書き手の考えや論の進め方に対して批評文を書く。批評文には、書き手の考えと論の進め方に対して、これまで学んだ知識、経験として再構築したことを、自分の言葉で表現することができる。

## 6 研究の計画

月	研究計画	月	研究計画
5	理論研究	10	検証授業Ⅰ
6	理論研究、実態調査	11	検証授業Ⅱ
7	研究主題の設定・作成、教材研究	12	データの分析とまとめ
8	教材研究、指導案作成	1	研究のまとめ・報告書作成
9	指導案作成	2	研究報告

## 7 研究構想図



## 8 研究の実際

実践事例1 平成30年10月18日 小郡市立御原小学校 第5学年1組 20名

(1) 単元 説明のしかたの工夫を見つけ、話し合おう「天気を予想する」

(2) 本単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、筆者の主張や論の進め方に対して根拠をもとに自分の考えをもち、論立てて批評文を書くことができる子どもを目指した。そのために、「筆者がどのように考えを主張しているか」という課題に対して、読みの視点や考えをつくる手順を確認し、筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えをつくる活動を位置付けた。

(3) 指導の実際

① つかむ段階(1/6)

この段階では、筆者の意図に目を向けさせるために、読み手の立場から自分の考えを書くことがねらいである。

まず、これまでの説明文について振り返らせながら、教師が教材文を読んだ。どんなことが書かれているか確かめ、「読み手の立場から」という読みの視点を提示し、筆者の考えに対する自分の考えを書かせた。子どもたちは、内容面に対する考えや、構成面に対する考えを書いていた。しかし、多くの子どもが筆者が主張する天気を予想するという内容について自分の考えを書いていた。そこで、筆者がどのように考えを主張しているのだろうかという読みのめあてをつくった。

【考察】「読み手の立場から」という視点を提示して自分の考えを書かせたことで、内容面だけでなく構成面にも目を向けて考えを書くことができた。また、単元の初めに視点を提示したことで、読み手の立場から読み進めていこうという課題意識をもつことができた。

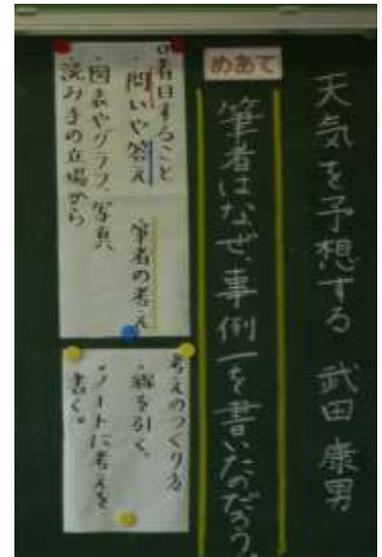
② つくる段階(2~5/6、本時5/6)

この段階では、「問いと答えの繰り返しの構成」「図表や写真の活用」「反例を用いた論の進め方」の説明の工夫を行った筆者の意図を読み取り、筆者の説明のしかたに対する自分の考えを書くことがねらいである。

まず、筆者の主張が事例3で説明されていることを確認することで、事例1が事例3とは反対の内容であることに気付かせ、課題意識をもたせた。子どもたちは、事例1で書かれていることが事例3とは反対の内容であることに気付き、「筆者はなぜ事例1を書いたのだろう」という本時のめあてをつくった。

次に、全体で本時の読みの視点「筆者の主張」「読み手の立場」と、考えをつくる手順「事例と筆者の主張に線を引く」「線

でつないで考える」を確認し、自分の考えを書かせた。(資料4)その際、全文が一目で分かるプリントを持たせ、視覚的につながりを考えさせた。子どもたちは、「事例1にも事例3にも『科学技術』と書いてあり、つながりがあるから事例1を書いた」等の考えをつくることができていた。しかし、読み手の立場という考え方からは、ほと



【資料4 「読みの視点」】

んどの子どもが筆者の意図を明確にすることはできなかった。

それから、自分でつくった考えを伝え合う活動を行った。子どもたちは、事例1と事例3のつながりについてのみ考えを出し合っていた。そこで、筆者と同じ立場の読み手、異なる立場の読み手がいることを捉えることができるよう、子どもたちに事前にとった「明日の天気を知りたいとき、どうやって天気を予想しますか。」というアンケートの結果を提示した。(資料5) 子どもたちは、アンケート結果から「天気予報を見て天気を知る人が多い」「筆者と同じ考えの人が少ない」ということを確かめた。自分たちが「読み手の立場」であり、事例1の考え方が実際の場面でも多いことに気付いた。そこで、「事例1がなくても筆者は自分の考えを主張できるのにどうして事例1を書く必要があったのだろうか。」という焦点化の発問を行った。子どもたちは、グループで考えを話し合い、「読み手の意見の事例1から書いて、読み手を納得させている。」「事例1を書いて読み手を納得させながら自分の意見を主張している。」等という考えを出していた。そして、「読み手の考えの事例1を書くと、読み手が納得し、主張が伝わる。」と読み手の立場から自分の考えを深めることができていた。

最後に、筆者の主張や論の進め方に対する考えを「今日の学習で」でまとめさせた。子どもたちは、「読み手に納得させるために、読み手の考えによせた事例1を書いている。」と自分の言葉でまとめることができていた。(資料6)

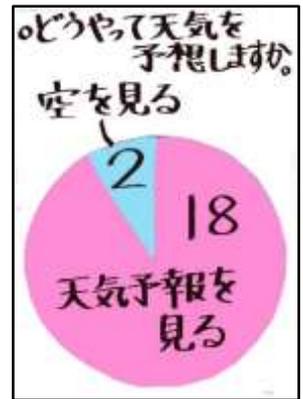
【考察】アンケートの結果を提示し、焦点化の発問をしたことで、子どもたちの話し合いが活性化し、読み手の立場から自分の考えをつくることができた。また、「読み手の立場」という視点をもたせたことで、論の進め方に目を向けて「今日の学習で」を書くことができた。

### ③ いかす段階 (6/6)

この段階では、「天気を予想する」で読み深めてきたことをもとに、筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えを批評文として書くことができることがねらいである。

そこで、これまでの読みの視点を確かめ、書き溜めてきた「今日の学習で」を参考にしながら、筆者に対する自分の考えを書かせた。子どもたちは、「問いと答えの繰り返しの構成」「図表や写真の活用」「反例を用いた論の進め方」に対する自分の考えを書いた。(資料7)

【考察】単元を通して「読み手の立場から」という意識をもたせたことで、「問いと答えの繰り返しの構成」「図表や写真の活用」「反例を用いた論の進め方」に対する自分の考えを書くことができていた。



【資料5 アンケート結果】

【資料6 今日の学習で】

わ	ら	ふ	く	と
こ	り	た	な	も
思	い	よ	ふ	筆
い	け	そ	る	者
ま	と	あ	た	の
し		を	め	者
た	と	読	に	え
	も	よ	前	を
	な	て	る	よ
		も	も	り
	と	ニ	の	ん
	く	ま	く	り
	は	は	し	り
	す	ん	た	い
	る	か		っ

【資料7 批評文の一部】

実践事例2 平成30年11月29日 小郡市立御原小学校 第5学年1組 19名

(1) 単元 事例と意見の関係をおさえて、自分の意見をまとめよう

「想像力のスイッチを入れよう」

(2) 本単元の指導にあたって

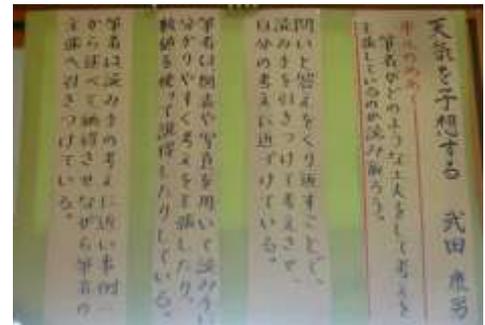
本単元の指導にあたっては、筆者の主張やメディアに対する自分の考えを自分の知識や経験をもとにつくり、共感したことや疑問に思ったことについて論立てて書くことができる子どもを目指した。そのために、「事例と意見を用いて筆者がどのように考えを主張しているか」という課題に対して、読みの視点や考えをつくる手順を確認し、筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えをつくる活動を位置付けた。

(3) 指導の実際

①つかむ段階(1/6)

この段階では、筆者の意図に目を向けさせるために、読み手の立場やこれまでの経験をもとに自分の考えを書くことがねらいである。

まず、これまでの説明文「天気を予想する」について振り返らせながら、教師が教材文を読んだ。(資料8) どんなことが書かれているか確かめ、「読み手の立場から」「自分の経験から」という読みの視点を提示し、筆者の考えに対する自分の考えを書かせた。



【資料8】これまで学習してきた読み方

子どもたちは、これまで学習してきたことをもとに、論の進め方に対する考えを書いていた。しかし、事例の内容と自分の経験を重ねて考えを書く子どもは少なかった。そこで、事例や意見の関係をおさえ、筆者の主張を読み取ろうという読みのめあてをつくった。

【考察】これまでの学習で書かせてきたように、「読み手の立場から」という視点を提示して自分の考えを書かせたことで、論の進め方にも目を向けて考えを書くことができた。また、「自分の経験から」という視点を提示したことで、事例と意見にも着目して読み進めていこうという課題意識をもつことができた。

②つくる段階(2~5/6、本時4/6)

この段階では、「事例1、2の事例と意見の関係」「事例3の事例と意見の関係」「事例1と事例3のつながり」という説明の工夫を行った筆者の意図を読み取り、筆者の説明のしかたに対する自分の考えをこれまでの経験と重ねながら書くことがねらいである。

まず、筆者の主張が事例3で「想像力のスイッチ」について説明されていることを確認することで、事例1、事例2の必要性について考えさせ課題意識をもたせた。子どもたちは、筆者の主張が事例3に書かれていることに気づき、「筆者はなぜ事例1、事例2を書いたのだろうか」という本時のめあてをつくった。

次に、全体で本時の読みの視点「筆者の主張」「読み手の立場」「自分の経験」と、考えをつくる手順「事例と筆者の主張に線を引く」「線をつないで考える」を確認し、自分の考えを書かせた。その際、全文が一目で分かるプリントを持たせ、考えのつくり方を動作化で示し、視覚的につながりを考えさせた。(資料9) 子どもたちは、「筆

者の主張が書かれているまとめの部分にも事例1にも『メディア』や『想像力のスイッチ』と書いてあり、つながりがあるから事例1、事例2を書いた」等の考えをつくることができていた。しかし、読み手の立場という考え方から、ほとんどの子どもが筆者の意図を明確にすることはできなかった。

それから、自分でつくった考えを伝え合う活動を行った。子どもたちは、事例1、事例2と筆者の主張とのつながりについてのみ考えを出し合っていた。

そして、事例1の内容と事例3の内容で、読み手の経験に近いものはどちらかを捉えさせるために、事例1と事例2の内容と「読み手の立場から」という読みの視点をもう一度確認した。さらに、「事例1や事例2がなくても筆者は自分の考えを主張できるので事例1や事例2を書く必要があったのだろうか。」という焦点化する発問を行った。子どもたちは、グループで考えを話し合い、「読み手の経験に近い事例1を書いて、筆者の主張に引きよせている。」「読み手に分かりやすい例を出すことで、自分の主張をより分かりやすく伝えようとしている。」等という考えを出していた。そして、「読み手の経験に近い事例1や読み手に分かりやすい事例2を述べることで、筆者の主張を読み手に分かりやすく伝えようとしている。」と読み手の立場から自分の考えを深めることができた。

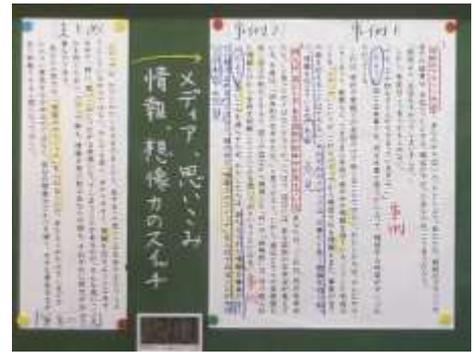
最後に、筆者の主張や論の進め方に対する考えを「今日の学習で」でまとめさせた。子どもたちは、「読み手に分かりやすく納得させるために、事例1や事例2が書かれていると分かった。」と自分の言葉でまとめることができた。

【考察】事例1や事例2の内容を確認し、焦点化する発問をしたことで、子どもたちの話し合いが活性化し、読み手の立場から自分の考えをつくることができた。また、「読み手の立場」や「自分の経験」という視点を確認したことで、論の進め方に着目し、自分の経験と重ねながら「今日の学習で」(資料10)を書くことができた。

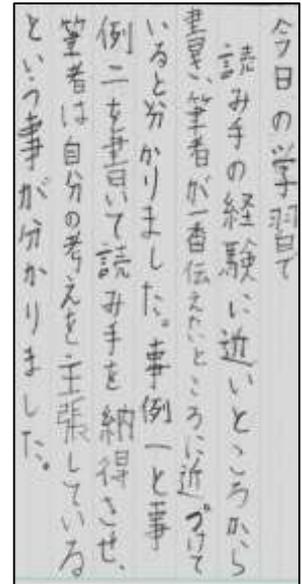
### ③いかす段階 (6/6)

この段階では、「想像力のスイッチを入れよう」で読み深めてきたことをもとに、筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えを自分の経験と重ねながら批評文として書くことができることがねらいである。

そこで、これまでの読みの視点を確かめ、毎時間の終末に書いてきた「今日の学習で」を確認しながら、筆者に対する自分の考えを書かせた。子どもたちは、「事例1、



【資料9 つながりがわかる板書】



【資料10 今日の学習で】



【資料11 批評文の一部】

2の事例と意見の関係」「事例3の事例と意見の関係」「事例1と事例3のつながり」に対する自分の考えを書いた。(資料11)

【考察】単元を通して「読み手の立場から」「自分の経験」という視点をもたせたことで、「事例1、2の事例と意見の関係」「事例3の事例と意見の関係」「事例1と事例3のつながり」に対する自分の考えを書くことができていた。

## 9 研究の成果と課題

### (1) 全体考察

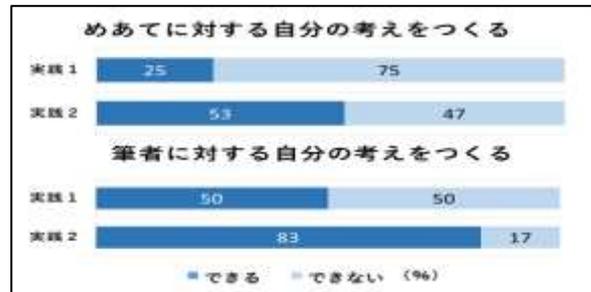
資料12は、授業実践1(10月)と授業実践2(11月)において、「めあてに対する自分の考え」及び「筆者に対する自分の考え」をつくることができたかどうかの子ども割合を示したものである。「めあてに対する自分の考え」「筆者に対する自分の考え」とともに、実践を重ねたことで考えをつくることのできる子どもの割合が増加している。また、「めあてに対する自分の考え」と比べて、「筆者に対する自分の考え」とつくることのできる子どもの割合が大きいのは、焦点化の発問やアンケートの提示等により伝え合う活動が活性化し、子どもの考えがより深まったからであると考えられる。資料13は、事前と2回の実践において、批評文を書くことができた子どもの割合である。批評文を書く際に、筆者の考えや論の進め方に対する内容で書くことができた子どもは76%になり、事前と比較して59ポイント増加した。これは、子どもたちが、視点を明確しながら読み進めることができたからだと思われる。

### (2) 研究の成果

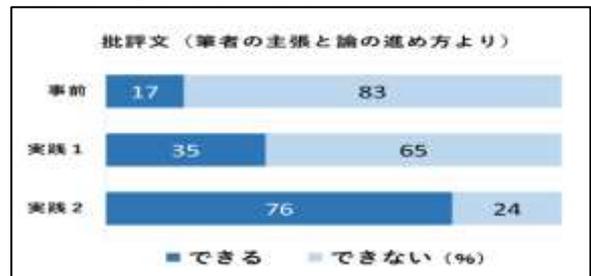
- 「なぜ、～」「どうして、～」という課題意識をもたせるめあてを工夫したことは、子どもたちが課題を焦点化して読み進めるのに有効であった。
- 教材文に応じて「読みの視点」を提示したことは、子どもたちがめあてに対する自分の考えをつくることのできるようにする上で有効であった。
- 伝え合う活動を活性化させるために、焦点化する「問い」を設定したことは、叙述に立ち返り、筆者の主張や論の進め方に対して自分の考えを再構築することができるようになる上で有効であった。
- 単元の終末の段階で、筆者の主張や論の進め方に対して、批評文を書く活動を位置付けたことは、これまで学んだ知識、経験として再構築したことを、自分の言葉で表現することができるようになる上で有効であった。

### (3) 研究の課題

- 子どもの知識や経験とのつながりを深める支援の工夫
- 低学年、中学年、高学年における「読みの視点」の系統



【資料12】実践後の結果(子どものノートより)



【資料13】実践後の結果(批評文より)